

東雲夢通信

東雲中学校校長室通信

文責 校長 渡邊 和彦

平成三十年八月三十日発行第九号



夏の思い出

七月二十日、終業式。始業式に全員と会えれば、それで良いと話した。命が一番大切と願った。

七月二十五日、県総体の開会式があった。命の危険すら感じる猛暑の中、県総体が始まった。記録も、賞も、自己ベストもちろんだ切だけど、安全であることを願った。卓球部は強豪、明豊中学に果敢に挑んだが、かなわなかった。二年生のリベンジに期待する。水泳部は、炎天下本場に健闘した。千五百メートルを堂々と泳ぎ切った、一年生、椎原くんは心を打たれた。陸上部は、ほとんどの選手が自己ベストを更新した。練習は嘘をつかないなあと、あらためて納得した。

七月二十六日、ブラスのコンクールがあった。十名となった部員。寂しさはぬぐえなかつたけど、彼女たちは意地を見せた。昨年に続く銀賞。受賞の報告に涙ぐんだ。

七月三十日、私は五十五回目の誕

生日を迎えた。両親に「産んで育ててくださり、ありがとうございます。これから先、誰が先に逝くかわかりませんが、誰が先に逝つても、迷惑をかけず、あつさりとお別れできますよう、願つております」と少々意地の悪いメッセージを送った。たまたま、同じ日に誕生を迎えた生徒が、お手紙をくれた。嬉しかったのですぐに返事を書いた。

八月六日、平和学習集会を行った。かつてNHKで放送された保戸島空襲の番組を全校生徒職員で視聴した。戦争はあつてはならない。そして学校を空爆するなんてあり得ない！怒りを覚えた。

八月九日、九州大会に出場した二年生、管さくらさんを応援に行った。県外への自家用車での出張は認められないため、休暇を取り応援することとした。佐賀「大和」インターを降り、「さくら」さんの待つ競技場へ向かった。見事に二位となった。底知れぬ可能性を感じた。頭の上に、氷の入ったビニール袋を乗せている彼女の姿が忘れられない。

八月十一日、今年はお盆が閉庁となった。今まではたとえお盆であつても、(特に私たち管理職は)学校に出勤することが求められていた。おかげで、山の日のこの日から少し、ゆつくり

できた。神戸嫁いだ長女が夫と、次女は東京の大学から、三女は宮崎の勤務先から帰つてきた。なのに私は、東雲小中時代の同級生と、食事に出かけた。元につぼん丸船長で、今は海難審判所で働いている彼のせいで、この夏三回も同じ居酒屋で、同じような刺身を食べる羽目となった。佐伯の魚は抜群に旨いらしい。

八月十三日、十四日、私の実家や妻の実家で仏壇に手を合わせた。母校で二年目の勤務ができて幸せなことを報告し、生徒達、職員、家族の健康、安全に力を貸して欲しいと祈った。

八月十五日、賑やかだった家族も、居住地へと帰り、さみしくなった。

八月十九日、親子奉仕作業があつた。一時間の作業だったけれど、見違えるように校舎周辺が綺麗になった。働くお父さんはかっこいい、額に汗するお母さん達は、美しい、そう感じた。(本当です)。その夜腰を痛めたのか、歩けなくなつた。

八月二十日、治療のかいあり、歩けるようになった。上司である教育長と面談があつた。学力調査の結果、素晴らしく高い成績を残した本校を大変に誉めて下さつた。生徒と先生方のお陰だと、涙が出そうだった。午後、さくらさんの応援のため岡山へ。